ありぱちゅ

薬丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありぱちゅ

【Ｎコード】
Ｎ４８８１Ｚ

【作者名】
薬丸

【あらすじ】
アリスが紅魔館にお呼ばれするお話。
ｐｉｘｉｖにてひっそり載せていたものです。

（前書き）

解釈にオリジナルの設定があります。

濃い霧に覆われた紅魔館の門前、一つの人影がふわりと空から降りてくる。
着地は軽やかに行われ、身だしなみを乱すことも無い。
しかし、少女は少し憮然とした表情で視線を落とす。

「本当に分からない」

一つ囁きを溜息と共に吐き出し、前を見やる。

「でも迷うようなことでもない」

少女はその一言と共に毅然を視線と態度にまとう。
一瞬だけ目を強く閉じ、心を奮わす。
明けた視界と意識を門に、そして門の向こう側にある紅い館へと置く。
一歩、二歩と力強く踏み出す足は気持ちの代弁だ。

「ようこそ、紅魔館へ。アリスさんのことはパチュリー様から伺っています。どうぞ中へ」

門の目の前には当然の如く守り人がいた。
慇懃に一礼をした後、扉を開く。

「…ありがとう」

例を言って大きな門を通る。

門を通ってすぐ、館の方から妖精が羽をパタパタとさせて飛んでくる。

「パチュリー様のところまではこの子に案内させます。
妖精君、粗相のないようにね」

門番は柔らかい口調で私と妖精を促す。
妖精はコクリと小さく頷いて、アリスの顔を見る。

「ついてきて、ください」

たどたどしくそう言った妖精は館へとゆっくりと飛んでいく。
アリスも妖精の後に続いて歩き始める。
少し歩いてふと後ろを振り返ると、すでに門は閉まっていて、門番の姿は消えていた。

アリスが妖精につれられてやってきたのは中庭。
刈り揃えられた芝生、季節の花々が整然と咲き乱れる花壇、中央には大きなケヤキの樹。
完璧な配置により完全な調和が生み出された、人工の自然美。一個の景観として完成された空間がそこにあった。

「綺麗ね」

思わず零れた言葉は、心から溢れたものだ。

「ありがとう。館の主としてその言葉は純粋に嬉しいわ。
といっても、この空間を作り上げたのは友人と侍女なのだけれども」

ケヤキを見上げるようにしていた視線を水平に戻し、声のした場所をキョロキョロと探る。
と、アリスの前で止まっていた妖精がふよふよとケヤキの向こう側へ。
ぐるりと周囲を見渡し、景観を瞼に焼付けてから妖精の向かった方へと歩き出す。
そこには紅茶と菓子類が乗った丸いテーブルと、四つの椅子と四つの人影。
しかし椅子にかけているのは二人で、残りの二人は椅子にかけた人物の隣に佇むようにして立っている。

「ようこそ、友人の客人。歓迎するわ」

強大にして麗しい妖怪の王がそこにいた。
悠然と微笑むは椅子に座した館の主、レミリア・スカーレット。
日傘を差す侍女を従えた様は絵画のようにはまって美しい。

「貴方とは今まであまり話したことが無かったから、色々と興味はあるのだけれど…
　用事が出来たからもう行かなきゃならない」

主は椅子にかけるもう一人を見て微笑む。

「ありがとうレミィ。暇つぶしに付き合ってくれて」

レミィと愛称で呼ばれた主は少しくすぐったそうにしながら、席を立つ。

「これぐらいの事だったら何時でも付き合うわ。
　というよりも、貴方はもっと私を頼るべきよ」

主はそう言って、侍女と妖精を連れて屋敷の中へと消えた。
残されるのは二人の魔法使い。
微妙な空気。緊張、不穏、焦燥が糸となって場を縛る様が目に見えるかのよう。

「緊張するのも疑念を抱いているのも分かってはいるけど…まずは座ったら？」

紫色の魔法使いがついと指をタクトのように振るう。
ギギッと勝手に引かれるのは七色の魔法使いに最も近く、紫色の魔法使いの対面にある椅子。

「そう、よね。何事もまずは話し合いが肝要。
そして話し合うには対等というテーブルにつかないといけないわ」

門前でしたように、一つ息をついて意気を胸に溜める。
そしてゆっくりと椅子にかけ、アリスは正面の魔法使いを見る。

「その気の奮い方、好きよ。昔の自分を見ているようで歯がゆくもあるけれど、初心に帰れるわ」

口に手を当て上品に、クスリと微笑む様に悪意は無く、温かい。
その笑みにアリスは憮然とした表情で返す。

「あら、気に障ったのなら謝るわ」

優雅な仕草に落ち度は見当たらないが、アリスは更に表情を険しくする。

「……何もかも訳が分からないわ」

搾り出すように吐き出された言葉は表情と同じように険しい声音。

「門番や吸血鬼の態度、屋敷の雰囲気、なによりも…」

バンッとアリスは掌で机を強く叩く。

振動でカップとポットが少しだけ浮き、カシャンという音を残して元に戻る。

「パチュリー・ノーレッジ、貴女になんで呼ばれたのかが一番分からない」

アリスの疑念は視線の強さに直結する。

重圧を感じさせる視線を、パチュリーは仕方が無いといった感じで首を竦めて受ける。

「なんにしても紅茶を入れる前でよかった。

……とりあえずお茶でも飲んで落ち着きましょう？」

再びついと指を振ると、ポットがアリスの前に置かれたカップを目指してふよふよと動き出す。

「まずは些事から片付けていきましょうか」

アリスのカップに紅茶を注ぎ、空いた自分のカップにも紅茶を注ぐ。

「メイリンやレミィは客人を迎えるというカッコを付けたかったのよ。

この館にはほとんど客人らしい客人がこないから、たまの客人に

はああやって堅苦しい真似で大きく見せて迎えたいのよ。
　まあ、結局は自分達が楽しいからやってるものだし、貴方が気にする事はないわ」

そう言っている間にポットを中心の元の位置へと戻す。
ポットを操っていた手を開いてカップに伸ばし、ゆっくりとした仕草で紅茶を呷る。

「貴女もどうぞ、毒なんて入ってやしないわ」

アリスは訝しげに紅茶の入ったカップを見る。
綺麗な琥珀色がたゆたっている。
かさりと木葉を揺らして入り込んできたそよ風が表面を撫で、とろりと揺らぐ。

「……話、長くなる？」

「少なくとも、私は貴方と会話を続けたいと思ってる」

紅茶から視線を戻し、アリスが見たパチュリーの表情は真摯なものだった。

「…そう、ね。ならいただくわ」

「ありがとう」

パチュリーはやさしく微笑む。
それを見てアリスは困惑してしまう。

「何で貴女がお礼を言うのかわからないわね。

…全く、紅魔館に対するイメージが大きく変わりそうだわ」
罠ならもうかかっていそうね、とアリスは苦笑を浮かべ、
落ち着いた所作でカップを持ち上げ、コクリと呷る。

「…美味しい。
蜂蜜が少し入っているのね、風味も舌触りも甘くて温かい。
読書の共に良さそうね」

「そういう風に私がブレンドしたのだもの。貴女の口にあってよかったわ。
それで…落ち着いたかしら？」

「ええ、だいぶ気が楽になったわ。なんだか気負いすぎてたみたいね」

アリスは首をすくめ、苦笑を微笑みに変える。
二人の間に張り詰めていた糸が、緩やかに解けていく。

「なら私がどうして貴女を呼んだか、という問いに対して答えましょうか」

本題。
パチュリーが最も言いたいこと。
アリスが最も聞きたいこと。

アリスの表情は柔らかい。
対応からして自分にとって悪いものではないと予想が出来たからか、
余裕があるようだ。
紅茶の味を楽しみながら答えを待っている。

「貴女にお願いしたいことがあるの」

難しいことではないはずだ。
幻想郷にかかわることではないだろう、それは巫女や普通の魔法使いの役目。
紅魔館にかかわることでもないだろう、それだと事はあの吸血鬼から聞かされる。
ならば個人的なこと、魔法研究の協力なんかが妥当だろう。

「あら、なにかしら？」

どうにも美味しい紅茶と美しい景観のお礼に、大抵のことなら協力する気になっているようだ。

単純だと思う。けれどたまにはそういうのもいい事だろうと私は思った。

「私と友達になってくれないかしら？」

……落ち着こう。とりあえず美味しい紅茶をもう一口飲んで落ち着け。
ゆっくりと考えればいい。焦る必要なんてどこにもない。
長い会話をあっちは期待してるんだ。だったらこういう間も大事にしないと。

「って、いきなりすぎるわよ！」

我慢し切れなかった。
…もう少し余裕を持とうよ。

「それは大いに認めるわ、貴女との接点は人間の魔法使いの話中と鬼騒動、天人騒動の時だけだものね」

同じ魔法使いという種族だが、だからといって交流があるわけでもない。

いや、むしろ同じ種族だからこそ嫌悪することが多い。

魔法使いは種別にしろ種族にしろ、偏屈な者がほとんどだから。

自分の興味のあるものにしか血道を上げようとせず、その他の興味が極端に薄い。

己が分野を邪魔するものは徹底的に排除する傾向が強いから、領域を容易に犯しかねない他の魔法使いを好まない。

孤独と孤高こそが魔法使いの在り方。

「でも、中には少し変わった魔法使いがいてもいいじゃない」

「…そーいう問題でもない気がするけれど」

すっかり対応に困ってしまう。

魔法の森に一人で住み始めてそれなりの時間が経過している。

苦も無く楽も無い生活に馴染み切ったアリスには、おそらく魔法使い同士のお友達という想像が全くつかないのだろう。

「私は魔法研究の手伝いを頼まれる程度の事と思っていたから、正直今困惑してる。

なぜ？と聞いてもいいかしら」

「貴女に興味が湧いたから、では端的過ぎるかしら？」

「……端折り過ぎ。

貴女は長話がしたいのでしょう？
甘い紅茶のお供として、どんな話でも、いくらでも聞いてあげる」
そう、と少し嬉しそうにパチュリーは呟き、思案するように目を閉じあごを引く。
「なら、遠回りでもしながら長く話そうかしら」
「お好きに」
蓮っ葉な態度に困ったような笑みを浮かべて紫色の魔女は語りを始める。
「私は魔法使いとして生まれてから、本と共に生きてきた。
それが私の在り方と識っていたから。
だから私は、知識をしたため続ける永遠の書物を指標として生きてきたの」
種別と種族を分けるのはそこだ。
人間の魔法使いは自身の根底に行き着くために自らの持つ全ての技術を費やして生きる。
生まれながらの魔法使いは自身の根底を初めから理解していて、それを証明するために技術を作り上げて生きる。
それぞれ始点が違うから、分かり合うなんてことは有り得ない。
だから、生まれながらの魔法使いは孤独なのだ。
自分が独りなのだと、生まれた時に悟っている。
「ずっと、それでいい、それでこそ魔女だって思ってたんだけどね…。
きっかけが一つあったの」

アリスはそのきっかけがなにか、すぐに予想できたみたいで、得心したような表情を浮かべる。
いつだって人を変えるきっかけになるのは出会いだ。

「レミィが赤い霧の異変を起こして、奴らがやってきた。
紅白と黒白の二人組みはレミィを懲らしめて異変を解決して、
更には紅魔館の在り方と住人の生活を変化させた。
まるで台風のようだったわ」

台風とは言いえて妙かもしれない。
唐突な台風は一切合財をめちゃくちゃにしていく。常に中心近くに居なくては被害を被る。
けれども台風の通った後は、清浄になった空気と清々しい快晴とが残るもの。

「レミィは暇つぶしと妹様が出られる口実を欲していたから異変を起こした。
暇つぶしは巫女が、妹様の檻は魔法使いが解決して、以降吸血鬼は人間に懐くことになる。
レミィは頻繁に神社に行くようになって、妹様は館を闊歩するようになったりとこの館は大きく様相を変えた。
けどそれぐらいで私の在り方は揺るがない。揺らぐ理由がまだ無い。
私に起きた変化なんて、たまに泥棒退治をするようになったぐらいだった」

アリスはクスリと笑う。
パチュリーと泥棒のやり取りが鮮明にイメージできたからだろう。

「数える事も馬鹿らしくなるほどのやり取りを越えて、私はいい加減うんざりしていた。
破られる為に存在するかのような結界を張り、解かれる為に存在するかのような魔法錠を用意するのに辟易としていたの。
そして、その倦みが事を起こす」

眉を下げ、目を瞑るパチュリー。

「からりと晴れたある日のこと、いつものやり取りを終えた私は結界の修復を行っていた。
だけどその日は体調が優れなくて、結界を張っている途中に持病の喘息が出てしまってね。
小悪魔に薬を取ってきてもらって、飲むと喘息はすぐに落ち着いたんだけど、
その一錠が最後だと言われてね…油断していたというならこの時からね。
薬は自身で作るのだけれど、一錠では本格的な薬作りに入るには心許なさ過ぎる。
仕方ないと張りかけていた結界をおざなりの略式で済ませ、私は永遠亭に出向いた」

後悔と反省から目を開き、パチュリーは困ったような苦笑いを浮かべる。

「薬を抱えて図書館に帰ってきたときに、私は自分の判断が誤っていたことを悟った。
無残に破壊された結界、入り口近くの本棚は虫食い状態。
それだけで状況の理解は済んだ。
…一日に二度の襲撃なんて無かったことだったから、すっかり油断していたのね」

「それはお気の毒に、としか言えないわね。
でも、本が盗られるのはいつものことなんでしょ？
貴女を変化させるほどの出来事ではないと思うけど」

いつものこと…ね、と苦笑を浮かべるパチュリー。

「あの図書館には元々世界中の忘れ去られた本を蒐集するという概念があった。
そして私はその概念を利用し易くするために、集められた本の管理を行う自律した魔道書を作ったの。
問題だったのは、結界が破壊された余波でその魔道書が不具合を起こしてしまったこと。
原因はあの破壊だけは得意な魔法使いが全力で魔砲を放ったから。
中途半端に張られた結界をいつもの物と思ったのでしょうね。
なんとか物理面での破壊は防いだものの、魔法式の方まで余波を防ぎきれなかった」

「ならその魔法式が解呪されて、魔道書が使い物にならなくなったのがきっかけ？」

「使い物にならなくなったわけではないけれど、要因はそこ。
魔道書自体にも何重もの障壁がかけていたから大分威力を緩和してくれて、魔道書はものの数分で自動修復したの。
けれど完璧に問題の解決をする事は出来なかった。
魔道書が不具合を起こしている間に入ってきた本と無くなってしまった本の確認が出来なくなったの」

「入ってきた本と盗まれた本が何かわからなくなったってこと？」

「そういうこと。入ってきた本はまだいいの。いつか私が見つければいい。
けど無くなった本、それらが何冊あって何という本だったのかがわからない事こそが致命的。
それは私の意義を大きく歪めた」

「…なんでなのか全く分からないわ、失った本の中に大切な何かがあったわけでもないのでしょう？
だって、なんていう本がなくなったのか分かってないんだものね」

「無くなった本が大事なんじゃなくて、本が無くなったことが重要なのよ。
私はあの図書館の本を全て読むことが当然だと思っていたの。
疑問にも思わず、ごく自然の在り方としてずっと過ごしてきた。
けれど、読めない本があることを知ってしまった。
…読まれない本があることを知ってしまった」

それは本と寄り添い共に生き、自身も本の一つとして生きてきたパチュリーにとって最大の恐怖。

「人間原理と言われる自己陶酔論は書物にこそあてるべき理論だわ。
本は人に読まれる為に存在するのだから、人の目に触れられない本は存在しない物として扱われる。
著者しか存在を知らない本はただの外部記憶に過ぎず、本としての価値、意味は無に等しい。
そして、それを理解してしまった私は、恐怖で目の前が真っ暗になった。
生きた心地なんて全くしなくて、むしろ生きている事自体が恐かった」

失った本を取り返しても意味が無い、パチュリーはもう知ってしまった。
孤独で良いと思ってた認識は間違っていて、傍らに誰かがいないと自らの存在は無に等しいという事を。
そして存在意義の崩壊を止める術は一つしか残されていなかった。

「それは私と言う存在を喧伝して、相応しい読み手を見つける事」

自分を観測し、自身の存在を有と断じてくれる他人が必要だった。
じゃないといつか、存在意義に喰われて死んでしまうから。

「原因はわかったわ。貴女が逼迫した状況だと言うのも理解した。
でもまだ因果の器を知ったに過ぎない。
もっと詳細を知りたいわ。その因からだと私という果が出てこないもの」

そうよね、頷くパチュリーに浮かぶのは少し困ったような表情だ。
もしかして照れているのだろうか？と勘繰るのだが…
ふっと力を抜くように口の端に笑みを浮かべて息を吐き、
長く空気を吸って、吐く。
それはアリスがする気の奮わせ方に良く似ていた。

「始まりは永遠亭の主従が月隠しを行ったときに、貴女が出向いた事から。
そこで私は私と全く違う魔法使いの存在を知った」

唐突に強い調子で話し始めたパチュリーに、弱気な雰囲気はもう無かった。
知って欲しいと、ここからを聞いて欲しいのだという想いが伝わってくるような気がした。

「その魔法使いは私の極地に位置する存在でね。
待つことを良しとせず、厄介事には首を出し、独断と偏見で物事を断じる。
私と似たところを探すのが大変なくらい」

何かが引っかかる。

「私は何故か気になった。理由が全然見当たらない。
だから私はその魔法使いを見ようと、知ろうとした」

それは、

「異変と知れば勇んで飛んで行くその人を、私は追いかけ続けた」

誰に向けられた言葉？

「私と全く違う考えで動き、私と全く違う解き方で真相に至る。
いつもいつも因果の両方ですれ違うのに、私の心は一つの思いを強めていった」

まるで、

「ああ、私の読み手はこの人しかいないんだと」

アリスに向けた言葉じゃないみたいに。

確かにアリスも色々な異変解決の場にいた。
月隠し、宴会、地震、間欠泉。
けれど、中心近くに”いつも”いたのは…。

「自分の感情や情動がわからないというのは不安だから、一応理由らしいものを考えたりしたわ。
本としての私が持ち主に望む条件は三つ。
一つ目は理解してくれること。目に触れられても内容が分からなければ意味が無い」

魔法使いならば、彼女の全てと言わないまでも多くを理解できるだろう。

「二つ目は用いてくれること。埃を被せて放置せず、事あるごとに引用して欲しい。
そして理解したことを実践してくれれば十全ね」

魔法使いならば、彼女の知識を有用しないなんて馬鹿なことはしない。間違いない。

「ちょっと」

さっきから、引っかかる言い回し。

「……何かしら？
あーそうよね、本である私から条件なんていうのは厚顔無恥だったわね。
でもそれは過去の私が出した考えだから、見逃してくれない、かしら…」

ハッキリと問いただそうとするアリスだったが、恥じ入る彼女の様子にすっかり出鼻をくじかれる。
眉と面を下げて、上目遣いのように見上げる仕草にアリスはすっか

りたじろいでしまう。

「いや、それは悪いとか思ってないし、ほら、高位の道具は持ち主を選ぶとか言われてるし、ある意味当然とか思ったり」

アリス自身、なんでこんなに動揺してるのかわからないのだろう。全くそんなこと無いのに、アリスがパチュリーを責めているような気がしてしまっていた。

「ごめん、わかってるわ。少しからかいすぎたかしら？
三つ目の条件はね…」

パチュリーは目を伏せ、息を一度溜める。

「ずっと一緒に居てくれること」

衝撃、だと思う。
心に穴を穿たれる様な感覚。

「そう、よね。
人間の寿命は短い。私達魔法使いは存在意義に食われるか、挫折してしまわない限り厳密な寿命はない。
ねぇ、貴女本当は…」

さっと、パチュリーは人差し指を口に当てる。
それだけのことで、アリスは言葉を紡ぐ事が出来なくなってしまった。
目を少し伏せ、なんと言えばいいのか迷っているアリスに、パチュリーは微笑む。

「私は貴女を呼んだのよ？」

優しく言った一言、その言葉の裏を探ろうとしてしまう。
アリスは未だに顔を上げることが出来ていない。

それを見たパチュリーは笑みを消し、初めて悲しそうな顔をした。

「アリス、良く聞きなさい。貴女は二つほど勘違いしてる。
一つは、その哀しみは私を通した自分に向けられているものだということ。
二つは、私が追っていたのは貴女だけだということ。
一つ目に関しては私は何も言えない。それは貴女自身の問題で、
今の私はどうこう言える立場じゃない。
だから二つ目の勘違いをこれから解こうと思う」

パチュリーの静かな言葉を聞いて、アリスは複雑な表情を浮かべて
顔を上げる。
捉えるのはパチュリーの真剣な表情と目。

「気付かなかったかしら？
永夜を越えての出来事から、いくつかの大きな異変があったわ。
鬼が宴会を開き、彼岸花が咲き乱れ、山に神が住み着き、天人が
暇を持て余し、間欠泉が噴出した。
確かにそのどれもにマリサは居た、でも私はその場に居ないこと
の方が多かったじゃない。
むしろ全部が一致するのはアリス、貴女だけなのよ？
顕著なのは六十年の周期を経てやってきた彼岸の異変。多くの人
間、妖怪、妖精が異変の輪に加わった。
けれど貴女は出なかった。だから私も出なかった。すごく分かり
易い式じゃない？」

ああ、確かにそう言われれば、そうなのかもしれない。
「というか、その行動って…」
まるで
「外の世界ではストーカーというらしいけど、私としてはもっと可愛らしく言って欲しいわね」
「いや、でも」
パチュリーの表情からは悲しげな雰囲気は鳴りを潜め、赤らみはにかむような表情が覗いて見れた。
そこからは恥じらいと強い意志とが感じ取れるよう。
「少女物の文学や乙女の噂話の中に登場するように、恋する乙女という響きが私の好み」
「なぁっ！」
かぁっと、一気にアリスの顔が赤くなる。
慌てふためくアリスに、パチュリーは畳み掛けるように言葉を続ける。
「色々と遠回りに言ってきたけど、貴女が何故と問うた答えの解は」
「ちょ、ちょっと…」
「私、パチュリー・ノーレッジは…貴女、アリス・マーガトロイド

に、
一目惚れをした」
「う……うぁう」
顔も耳も真っ赤になって、完全に固まってしまったアリス。
そこに、
「だから貴女が、私の読み手になってはくれないかしら？」
トドメ。
完璧に、他に言いようがない、
これはパチュリーの全霊を込めたプロポーズだ。
「もちろん、今すぐ答えを出せなんて言わない。一ヶ月でも…百年先でもいい。
けれど必ず、答えを聞かせて欲しい」
「……そう、ね。ごめん、今日は帰る。
混乱してるどころの話じゃない。全部がいきなりで圧倒されてる」
アリスは顔を伏せながら椅子から立ち上がり、来た道を歩き出す。
心なしか足元があやしい。
パチュリーはそれを見送ることはせず、琥珀が揺れるカップの中を見る。
…誰だって自分の弱っている姿など見せたくない。
ざっざっと、編み上げのブーツが芝生を蹴る音が遠ざかっていく。
パチュリーはカップを手に取り、紅茶を呷る。
そして一息をつこうとした瞬間、足音が止った。

首をかしげ、疑問符を浮かべるパチュリー。

「どうしたの？」

大木を挟んでいるから気持ち大きめの声で、見えない相手に疑問に問う。

「…した」

アリスは応えるが、声が小さくてうまく聞き取れない。

「何て言ったの？」

パチュリーは言葉を強めて聞き返す。

「…明日。明日のこの時間に答えを言いにくる。
だからその紅茶を準備して待ってて！」

かさりと、木の葉が揺れるほどの大きな声。
後に響くのは地面を強く蹴りだした音だった。

ふふっと、気を抜いたように笑うパチュリー。
そして、

「もう出てきていいわよ、マリサ」

「…っ、まじか」

ハッキリと”私”に向けられる声と視線。

「とりあえず降りて来なさい。このままじゃ首が疲れる。
全く、傍観者を装って語り部でも気取るつもりだったのかしら？」
パチュリーお得意のじとっとした強固な視線。
これは聞かざるを得ない。
「へーへー、わかりましたよ」
私は割かし座り易かった木の枝に別れを告げ、ほうきを片手に飛び降りる。
地面が近付くと、ほうきに込められた魔法式が自動的に発動する。
ふわりと空気が柔らかくなったような感覚の後、すたっと地に足をつける。
「アリスのカップでいいから紅茶を入れてくれ」
勝手にアリスが座っていたところに腰掛ける。
「……全く、貴女はいつも勝手ね」
しぶしぶといった感じで指を振るうパチュリー。
注がれる紅茶の音がやけに大きく響く。
「なぁ、いつから気付いてた？」
ポットが元に戻る。
「最初から全部。
メイリンがアリスを迎えた後、すぐ知らせに来てくれた。
アリスが入ってきた直後に、貴女が結界を越えたって」

パチュリーが入れてくれた紅茶を一口で飲み干す。
予想通りの甘ったるい香りと味が口に広がる。

「中庭に居るっていうのは？」

パチュリーは無言で先ほどの行為を繰り返す。
注がれる甘い紅茶。

「言ったでしょ、最初から全部。
この中庭は私の空間なのよ、不自然な風が吹けば気付く。
アリスが紅茶を飲もうとしたとき、二人の視線がカップに集中した瞬間を狙って特等席に移ったでしょ」

「はっ、本当に最初からかよ」

今度は紅茶に手は出さない。

「…ふぅ、私はこの不法侵入者をどう扱えばいいのかしらね」

パチュリーは本当に困り果てたように表情を硬くする。
うん、コイツほど当惑顔が似合う奴はいない。

「いや、お前は中庭に侵入した私を黙認した。
住人の一人が認めたんだったら不法な侵入じゃないだろう？」

はぁ、と更に表情に影が差す。

「黙殺だったとしたら殺されても仕方がないって言い分ね」

「まあ、いつものことだからいいじゃないか」
いつものことね、とついさっき見た表情で返される。
「……」
「……」
妙な沈黙が二人の間に広がる。
「…言いたい事だか聞きたい事があるんでしょ？
”いつも”みたいにちゃっちゃと聞けばいいじゃない」
それもそうか。
今ここで慣れない遠慮なんてしたら、一生聞けなくなるであろう話題だ。
「だな。…しっかし、なにからなんて聞けばいいのか。
あー抽象的で悪いけど……本気か？」
「冗談で言える内容でもないでしょう」
即答。
つまり本気。
分かってたけど、これは本当の決意だ。
「だったら後は一つだけだな」
この魔女は最初から私がいることに気付いていたと言った。
なのに必要以上に事細かに、心を煽るように話していた。

「……何で私に聞かせたんだ？」

その一言を放った後のパチュリーの変化は、私が今まで見たことのないものだった。

その言葉を待ってましたというように浮かぶ好戦的な笑顔。
そして意志のこもった強い視線を私に向けて、思いの全てをぶつけるような一言が放たれた。

「簡単なことよ。
ただの宣戦布告」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4881z/

ありぱちゅ

2011年12月16日17時59分発行